

北海道で！縄文を知る

第1回

：縄文世界遺産(かつてにフットパス)

縄文の北海道へのいざない



小杉 康 (こすぎ やすし)

北海道大学大学院文学院考古学研究室教授  
北海道大学埋蔵文化財調査センター長

1959年埼玉県生まれ。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学(考古学専攻)。日本学術振興会特別研究員、国立歴史民俗博物館外来研究員、明治大学文学部助手を経て、現職。北海道大学埋蔵文化財調査センター長兼務。主要著書に『縄文のマツリと暮らし』(岩波書店)、『縄文時代の考古学』全12巻(共編著、同成社)、『はじめて学ぶ考古学』(共編著、有斐閣)、『火の考古学』(北海道大学考古学研究室研究紀要、第1号)など。日本考古学協会会員、北海道考古学会会員。

みなさん、こんにちは。

これから1年間、12回にわたって北海道の縄文文化を紹介します。私は北海道大学で考古学の研究と教育に携わっております、小杉康と申します。さて、考古学と一口に言っても取り扱う範囲はとて広くて、現在では「考古学は人類史が研究対象である」などという言い方もします。すなわち人類が「誕生」してから、今日に至るまでの長い道のりがすべて人類史です。一般的には、考古学と言えば、原始や古代といった大昔のことを研究すると思われているかもしれませんが、それだけではないのです。文字による記録が残されるようになってからも、その当時であっては当たり前すぎてわざわざ記録として残されなかったこと、あるいは文字に残されては都合の悪い事柄などなど、これらもすべて人類史の一部であり、これらのことも現代の考古学は研究対象としています。

産業考古学と戦跡考古学

例えば、比較的新しい時代を研究対象とする考古学内の細分された分野としては、「産業考古学」や「戦跡(あるいは戦争)考古学」などといった研究分野があります。18世紀、イギリスに端を発した産業革命は、地域によって遅速はありながらも、その後地球上の多くの国々、地域を席卷します。残された帳簿類をはじめとするさまざまな文字記録類(ドキュメント)ではなくて、鉱山に残された坑道の実態や、採掘現場、廃絶された工場の跡地、ゴミ溜めなどを調査することによって、物的証拠をもって文字記録に残されていない実際の様子を再構成しています。北海道では明治期、開拓使の時代が、この産業考古学の研究対象となります。戦跡考古学は、主に第二次世界大戦時に残された建造物や砲撃の痕跡などを調査して、これまでに書き残されなかった戦争の実態に迫ろうとしています。道東の根室や釧路の海岸に残されたトーチカ(掩体壕・シェルター)などは、戦争考古学が研究対象とする貴重な戦争遺跡です。

縄文文化と縄文時代

さて、これからお話する内容は、だれもが考古学の研究対象として疑うことのない縄文文化についてです。南米のインカ文明を「インカ」と言うだけでも通用するように、世界的には縄文文化は「JOMON」と表記しただけでも通用するようです。そこで一点、注意を喚起しておきたいことがあります。「縄文文化」と「縄文時代」といった呼び方についてです。日本史では「奈良時代」を代表する文化が「天平文化」である、といった理解の仕方をします。政治や経済に対比される、なんとなく高尚な事柄、例えば建築や文芸、宗教などに対して「文化」として扱っています。高校までの歴史の授業では、同様に「縄文時代」の文化が「縄文文化」であるといった説明がなされていると思います。しかし、考古学で取り扱う文化とは生活様式全般のことを意味しております。少し専門的な説明の仕方をさせていただけるならば、考古学でいうところの文化とは、物質文化として残された生活様式の総体のこ

とです。私は、国家が成立する以前の年代に遡る考古学の研究対象は、ここで述べたような意味で「文化」と呼ぶことが、より適切であると考えています。ですので「縄文時代」と呼んだり書いたりすることなく、「縄文文化」としています。一国や一民族の歴史を遡って、どこまで古く遡れるかを競い合うのではなくて、古代において「国家」が成立する以前には、さまざまな生活様式の人たちの暮らしがあり、その多様性を解明することこそが、現代の考古学に託された重要な役割だと考えています。全ての考古学者がこのように考えて、「縄文文化」と言っているかというところではありませんが、最近では少しずつ賛同者も出てきました。話しの内容が少しかたくなりました。皆さんは専門家の間ではそんな議論もあるのだな、くらいで読み進めてください。

### 本シリーズの予定

本シリーズ（連載）では、昨年7月に世界遺産に登録された『北海道・北東北の縄文遺跡群』のうち、その構成資産である北海道の遺跡を取り上げて、皆さんを縄文の世界に招待いたします。縄文世界遺産については、本誌では2020年から翌年にかけて、登録を目前に控えて、構成資産の遺跡がある各自治体の担当者でもある考古学者の方々が、それぞれ詳しい説明をしておりますので、今回の企画（特集）は、柳の下での二匹目のドジョウを狙った内容では面白くありません。そこで考え出したのが、表題にあるように、『縄文世界遺産〈かつてにフットパス〉』構想です。これについては、後ほど詳しく説明いたします。

そしてもう一つの目玉は、北海道大学に在籍する考古学研究者による、それぞれの専門領域の最先端の研究成果を踏まえた、北海道の縄文文化についての各概説です。『縄文世界遺産〈かつてにフットパス〉』として北海道にある構成資産の遺跡の紹介をする回と、専門領域ごとに北海道の縄文文化についての最先端の研究成果を概説する回とを、交互にお届けする予定です。まずは、どんな専門領域のお話の回があるのかを紹介しておきます。

#### 第3回（2022年10月号）

〔仮題〕縄文人の石器利用（高倉 純）

#### 第5回（2022年12月号）

〔仮題〕縄文の住まい（守屋 豊人）

#### 第7回（2023年2月号）

〔仮題〕縄文人の植物利用（高瀬 克範）

#### 第9回（2023年4月号）

〔仮題〕縄文の年代を探る（國木田 大）

#### 第11回（2023年6月号）

〔仮題〕鳥と縄文人（江田 真毅）

そして隔回ごとに『縄文世界遺産〈かつてにフットパス〉』を私が担当します。道内の縄文世界遺産の構成資産は6遺跡（+1遺跡）です。プラス1としたのは「関連資産」とされた遺跡が1つあるからですが、それがなぜそのような取り扱いになったのかは、回を重ねたなかで説明いたします。

第2回（9月号） キウス周堤墓群（千歳市）

第4回（11月号） 垣ノ島遺跡（函館市）

第6回（1月号） 大船遺跡（函館市）

第8回（3月号） 北黄金遺跡（伊達市）

第10回（5月号） 入江・高砂貝塚（洞爺湖町）

第12回（7月号） 鷲ノ木遺跡（森町）

このような順でお届けします。

### 遺跡への来訪の仕方（アクセス）

先に、二匹目のドジョウにならないためにも、と述べましたが、『縄文世界遺産〈かつてにフットパス〉』自体は以前からひそかに温めていた企画（思い付き）なのです。ここ数年、私は世界遺産の構成資産となった縄文遺跡のいくつかで、保存や整備、活用について議論する専門委員会の委員として、いろいろな発言や提言をしたり、また多くのことを学ばせていただきました。そのなかでいつも感じたことがあります。遺跡の整備や活用については、委員の方々が専

専門的な立場からいろいろな意見を述べます。それらを参考にしながら、自治体では遺跡の整備・保存と来場者の見学しやすさとの両立をはかりながら、ぎりぎりのところまで調整を重ねて、その実現へと向けていきます。遺跡内をどのようなコースで見学してもらうのか、遺跡の景観を損なうことなく、かつ気が利いた解説板をどこに設置するのか、ベンチの数やその材質は何が適切か、およそ考えつくあらゆることが検討されます。そのなかで、どうしても手薄になってしまいがちなのが、遺跡への来訪の仕方（アクセス）についてです。もともと遺跡は、そう交通の便のいいところばかりにはありません。公共の交通機関を利用することが、きわめて難しいところに多くの遺跡が位置しております。委員からは、いろいろな観光地で取り入れられている『ぐるりん号』などの循環バスを走らせる提案も出てきますが、これに関しては自治体にとってはかなりハードルが高いことなのではないでしょうか、なかなか積極的な反応が返ってきませんでした。でも大丈夫とばかりに、現在は車社会ですから、自動車での来訪を予測して、大型の観光バスにもマイカーにも対応できる駐車場を完備する方向で話しは進みます。たしかに、これが現実的な対応策なのでしょう。

### 遺跡の価値と魅力

しかしながら、ここでちょっと立ち止まって考えてみたいことがあります。各地の世界遺産には外国からの多くの観光客も訪れています。『縄文世界遺産』の場合もそうですが、シリアルノミネートとあって、地理的に離れた複数の構成資産から成る世界遺産も多くあります。そんな場合、もちろんバスツアーに参加して巡る人たちもいますが、バックパックを背負って悠々と歩いて巡っている人も目にすることがあります。特に、外国から来られた見学者に多く見られるようです。裏を返せば、そのような日本人の見学者を見かけることは、これまでほとんどありませんでした。

そこで、公共の交通機関の利便性の高い既存のターミナルから縄文遺跡まで、いっそのこと歩いてみてはどうだろうか、という発想です。そうなると整備する

のは世界遺産となった遺跡の内側だけでは済まされません。遺跡の周りはもちろんのこと、そこに至るまでの道筋にも目を向けてみましょう。遺跡に至る途中で出会うことになる小川や沼沢、そこには梅花藻ばいかもが花をつけているかもしれません、アイヌ語地名、開拓記念の石碑、廃屋となったサイロやそれに代わって登場した牧草をラップで包んだようなロールペールラップサイロのある風景、そして遠景には夕日に映える残雪の山並み、…。これらは世界遺産となった縄文遺跡とは関係ないと思われるかもしれませんが、そうではありません。

遺跡とは、発掘されたたてあなじゅうきょし竪穴住居址や復元された住居、記念物などが、そのままの姿で見られるところ、ではありません。特に古い年代の遺跡であるならば、そこには悠久の時の流れと人類の多くの営みの痕跡とが累積しているところであり、それに価値を見出し、後世の人たちに残そうと決断した、その地域の人たちの意思があらわれたところ、それが遺跡なのです。そして世界遺産の本来的な価値は、「世界遺産そのもの」だけでなく、その場所を現在まで良好な状態で守り続けてきた、地域の人たちとその暮らしを含めた地域文化としての魅力にあります（なお、世界遺産に関しては「本質的価値」という言葉がよく使われますが、ここで述べている「本来的な価値」とは意味が異なります）。

### フットパスとは

話題を「いっそのこと歩いてみては…」に戻しましょう。そこで思いつくのが「フットパス」です。最近よく耳にすることもあるフットパスですが、直訳すると「遊歩道」となるのでしょうか。遊歩道や散策路と聞くと、歩きにくいところには擬木や柵などが設置されている、ある程度整備された散歩道などを思い浮かべるかもしれませんね。しかし、フットパスとは、地域の中に息づく自然や暮らしの風景を楽しみながら歩くこと、そのような歩行を可能にする小道、そしてその活動を支持し支援する考え方、これらの総体がフットパスです。イギリス発祥のフットパスですが、現在では

日本国内にも多くのフットパスが整備されています。フットパスにとって最も大切なことは「歩くこと」であり、「地域の中に息づく自然や暮らしの風景」です。それを手助けするために、「コースマップ」や「道標(コースサイン)」などが用意されます。

### 『縄文世界遺産 〈かつてにフットパス〉』

先に述べたように、史跡の保存・整備の専門委員会の委員として「公共の交通機関の利便性の高い既存のターミナルから縄文遺跡まで」の道のりを、フットパスとして整備することなどを提案すると、行政としては正規な「コースマップ」の準備(印刷・配布・HPでの公開など)のための予算の確保、「道標(コースサイン)」に至ってはそれに加えて、設置場所の地権者との交渉などといったように、クリアしなければならない事案が次から次へと出てきます。税金を使用する以上は、厳正な執行が求められるので仕方ありません。そこで登場するのが「かつてにフットパス」です(もちろん私の造語です)。既存の道路標識や「距離標(キロポスト)」、既存の案内板、場合によっては商店の看板なども「かつてに」利用させていただいて『道標(コースサイン)』とします。『コースマップ』は、単なる目的地への案内図にならないように気を付けます。先に世界遺産の本来の価値とは「その場所を現在まで良好な状態で守り続けてきた、地域の人たちとその暮らしとを含めた地域文化としての魅力」であると説明しましたが、そのような内容を盛り込んだものにします。そうは言っても考古学者が用意するので、少し人類遺跡に肩入れしたものになることはお許しください。これが本シリーズでお届けしたいと考えている『縄文世界遺産 〈かつてにフットパス〉』です。

### 願いを込めて

縄文世界遺産の各遺跡には、これまでも自分の専門の研究や史跡整備の委員会のために何度も足を運びましたが、今回はあらためて本シリーズの『縄文世界遺産 〈かつてにフットパス〉』のルート設定のために各遺跡を訪ねることとします。ルートの起点は原則とし

てJRの最寄り駅とする予定です。ルートの終点が各遺跡となるのか、別のJRの駅やバス停となるのか、全体の歩行距離も考慮して、これから実際に検討する予定です。

世界遺産の本来の価値は、その場所を現在まで良好な状態で守り続けてきた、地域の人たちとその暮らしとを含めた地域文化である、と先に説明しましたが、実はこの説明には、そうあってほしい、という願いが半分込められています。相当な距離を歩いて世界遺産である各縄文遺跡にアプローチします。その縄文遺跡はもちろんのこと、そこに至るまでの間の各所は、歩くことが楽しめるような素敵な場所であり環境であってほしいものです。そこを歩く人は、自らゴミなどを残してきてはいけませんし、また歩く道にはゴミなどが落ちていてほしくありません。

行政が整備を完了した世界遺産としての縄文遺跡を訪れる、といった発想をやめてみましょう。世界遺産としての縄文遺跡とは、その地域で生活する人たちとそこを訪れる見学者とが、共にこれからも継続的に守り育てていくべきものなのです。ここでは「フットパス」を冠したネーミングをしていますが、このイギリス発の『フットパス』やアメリカ発の『ロングトレイル』とも違った、『お遍路さん(札所巡り)』といった歩行文化が日本にもあります。そこには「トレイルエンジェル」(ハイカーをサポートする人たち)や「お接待」などといった共通する精神が息づいています。よその土地や外国から訪れた人たちであっても、また信仰や宗教にかかわらず、互いに「おもてなし」をする精神(ホスピタリティ)が息づいています。この殺伐とした現代社会にあって、遺跡を「史跡」として守り後世に伝える、それが世界遺産であればなおさらのことですが、そうすることの理由は、「我々」の歴史自慢のためではなく、さまざまな地域や国々の人たちが、それぞれの多様性を認め合いながら共生していくための知恵だからなのではないでしょうか。そのような一助となることを願って、本シリーズを始めます。

ようこそ、北海道の縄文遺跡へ。